

小野扇町遺跡

県営水田営農活性化排水対策特別事業
(松崎東地区)に伴う発掘調査報告書

1996. 3

諫早市埋蔵文化財調査協議会

小野扇町遺跡

県営水田営農活性化排水対策特別事業
(松崎東地区)に伴う発掘調査報告書

1996. 3

諫早市埋蔵文化財調査協議会

序 文

このたび刊行の運びとなりました『小野扇町遺跡』は、県営水田営農活性化排水対策特別事業に伴う第2次の調査結果をまとめた報告書となります。

前年度の調査結果は、『小野曾屋遺跡』として報告書を刊行しておりますが、今回の調査におきましても、この地域に私達の祖先が手を加え、生活を始めた時期およびその方法についての新たな知見を得ることができました。

具体的な内容については、本書に掲載のとおりですが、なにぶん限られた範囲での調査であるため、本遺跡の詳細な内容についての解明には至りませんでしたし、また、当初の目的でありました条里遺構の確認についても今後の課題として残っております。

本市においては近年、本遺跡が所在する小野地区についての調査を継続して実施しておりますが、今回の調査も含め、これらの発掘調査の成果が、今後の調査・研究に大いに活用され、さらに地域の学術・文化の向上に少しでも役立つことを願って止みません。

最後に、本書の刊行にあたり、多大な御尽力をいただきました関係各位をはじめ、発掘作業や整理作業に従事されました方々に対し衷心から厚くお礼申し上げます。

平成8年3月31日

諫早市埋蔵文化財調査協議会

会 長 山 口 利 男

例 言

1. 本書は県営水田営農活性化排水対策特別事業（松崎東地区）に伴う小野扇町遺跡（おのおうぎまちいせき）の緊急発掘調査報告書である。同事業による第2次の報告となる。
2. 調査は長崎県諫早耕地事務所の依頼を受け、諫早市埋蔵文化財調査協議会が実施し、同協議会 川瀬雄一・古賀 力・橋本幸男が担当した。
3. 遺跡名は調査区域の大部分に相当する字名を用いたが、先報告書（小野曾屋遺跡）と同じく小野条里遺跡の範囲に含まれる。
4. 調査期間は、1995（平成7）年11月1日～同年12月10日である。
5. 調査に伴う測量、実測は川瀬・古賀・橋本が行い、遺構及び遺物の写真撮影は古賀が担当した。出土遺物の整理、実測、トレース等は磯道真由美・大久保慎也の協力を得て橋本・川瀬が行った。
6. 本書中に示した遺物や遺構の標高は海拔高度である。
7. 本書中の図に付した方位のうち、MNを付けたものは磁北であり（おおむね西偏5度）、付していないものは真北を示している。
8. 出土遺物および調査関係図面・写真類は、諫早市郷土館に保管している。
9. 理化学的分析（プラントオパール分析・杭のC¹⁴による年代測定）を予定していたが、プラントオパール分析についてはその結果を収録できなかった。
10. 本書の執筆・編集は橋本が担当した。

本文目次

序

例言

I. 調査に至る経緯と調査組織	1
II. 扇町遺跡の位置と周辺の遺跡	2
III. 調査	5
III-1. 調査区の設定	5
III-2. 土層について	5
III-3. 出土遺構	6
1) 24区の杭列	6
2) 28区の杭列	10
III-4. 出土遺物	11
1) 縄文式土器	11
2) その他の遺物	14
3) 28区の杭	15
IV. 28区出土杭の年代測定結果	15
V. まとめ	17
1) 縄文晩期土器について	17
2) 28区出土杭列の年代について	17
3) 杭列の方向について	17
4) 条里制施行の方向について	18
報告書抄録	巻末

挿入図目次

第1図	諫早市の位置	2
第2図	周辺遺跡分布図	3
第3図	調査地点周辺図	4
第4図	水路工事の位置と調査区の設定	5
第5図	24区杭出土位置図	6
第6図	土層図	7
第7図	24区杭列 平面図・立面図	9
第8図	28区杭列 平面図	10
第9図	28区杭列 立面図	10
第10図	縄文式土器出土位置 (平面・立面図)	12
第11図	出土遺物実測図	13
第12図	28区出土杭実測図	14
第13図	杭列方向図	18
第14図	従来の条里区画想定図	19
第15図	条里区画想定図 (案)	20
	出土遺物レベル表	15

図版(写真)目次

1. 遺跡付近の景観／24区杭列出土状況
2. 28区杭列出土状況／30～31区縄文式土器出土状況
3. 24区杭列出土状況／24区杭埋設状況／26区南壁の土層
4. 28区北端西壁／28区杭列頭部出土状況／28区杭列頭部 (南から)
5. 28区杭列出土状況 (北から)／28区杭先端部の様子
6. 30区遺物出土状況 (10) 他／30区遺物出土状況 (8) 他／31区西壁分析サンプル採取状況
7. 31区縄文式土器出土状況／31区石包丁出土状況／31区 (試) 南壁ポイント出土状況
8. 遺物
9. 遺物／杭

I. 調査に至る経緯と調査組織

諫早市南部において、農業基盤の充実を図ることを目的とした、県営水田営農活性化排水対策特別事業（松崎東地区）が計画された。これによって、諫早市教育委員会は市土地改良課経由で事業主体である諫早耕地事務所より、「平成3年9月17日付諫耕第471号」をもって事業区内の埋蔵文化財の所在および調査の必要性について協議を受けた。

これに対し諫早市教育委員会は、昭和61～63年に計画地内で実施された「宮崎館等遺跡等範囲確認調査」によって、条里関連遺構と推測される杭列や溝状遺構等が検出されていることから、工事に先立って発掘調査が必要であるとの回答を行った。

その結果、事業の計画段階から県教育委員会および諫早耕地事務所と、調査の方法について協議を重ね、同事業の地元組合である小ヶ倉溜池土地改良区および地権者の協力を得て第1次として平成6年11月1日から同年12月8日の期間で「曾屋」地区の調査を実施した。この成果は「小野曾屋遺跡」として報告書が刊行されている。

本報告書に収めた調査は第2次であり、同事業中の「松崎東2号排水路」工事に伴い、平成7年11月1日～同年12月10日に実施した。調査の組織については以下のとおりである。

調査主体

諫早市埋蔵文化財調査協議会

会 長	諫早市教育委員会	教育長	山 口 利 男
副 会 長	諫早市	農林水産部長	前 田 昭 紀
幹 事	諫早市教育委員会	教育総務課長	田 嶋 将
〃	〃	文化学習課長	廣 田 陽一郎
〃	諫早市農林水産部	土地改良課長	早 田 隆 一
監 事	諫早市教育委員会教育総務課課長補佐		山 口 哲 雄
事 務 局			
事務局 長	諫早市教育委員会文化学習課課長補佐		浦 川 謙 司
事務局 員	〃	主任	川 本 正 博
調 査 担 当	諫早市教育委員会文化学習課	事務職員	川 瀬 雄 一
〃	〃	嘱 託	古 賀 力

調査担当

橋 本 幸 男

発掘作業員 磯道真由美，岩永くに子，梅崎カズエ，大久保慎也，久保スミエ
溜淵 敬二，徳永フジエ，西村 正満，橋本 雪義，藤林不二彦
堀口 ミヲ，真崎トヨ子，山口 広人，山本フミ子，塚元 涼世
林田 藤代，熊野 雅子，酒井 睦子

II. 扇町遺跡の位置と周辺の遺跡

諫早市は長崎県本土の中央部にあって、西彼杵半島・長崎半島と島原半島および県北部を結ぶ要の位置を占める。また、大村湾・橘湾・有明海という、それぞれ性格の異なる三つの海に面しているという特徴も持っている。その中で、潮の干満の差が大きいことで知られる有明海(諫早湾)に面した小野地区は、干潟が発達した地域で、条里制の施行が認められるなど古くから開田の対象となっている。特に中世末期以降現代まで干満の差を利用した干拓が盛んに行われており、広大な水田地帯が形成されることとなった。

小野扇町遺跡は、このような水田地帯のなかにある遺跡であって、現耕作面の高さは海拔3～2.8mである。かつて条里制が施行されたと推定される範囲に含まれており(右図No.12参照)、坪名の遺称が散在する。

本遺跡の南にある丘陵地帯とその周辺部には、条里制関連遺跡として調査が実施された「宮崎館遺跡」を始めとして旧石器～近世の遺跡が集中している。調査が実施された遺跡としては前出「宮崎館遺跡」とその範囲に含まれる「小野古墳」、「小野宗方遺跡」、本遺跡と一連の調査である「小野曾屋遺跡」がある。

(参考文献)

「宮崎館遺跡等範囲確認調査概報」諫早市教育委員会 1987。

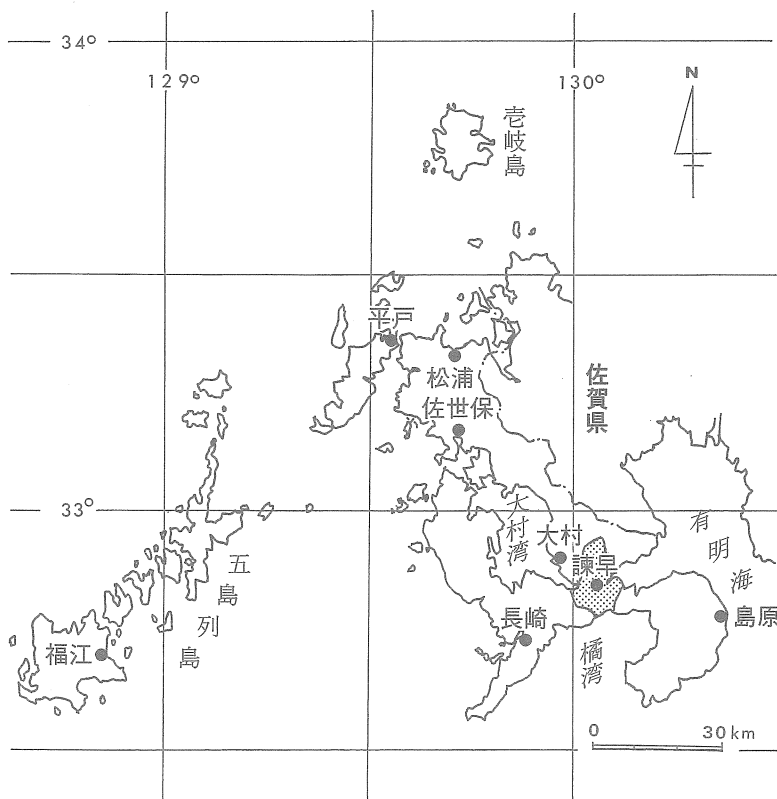
「宮崎館遺跡等範囲確認調査概報」—第2次— 諫早市教育委員会 1988。

「宮崎館遺跡等範囲確認調査報告書」諫早市教育委員会 1989。

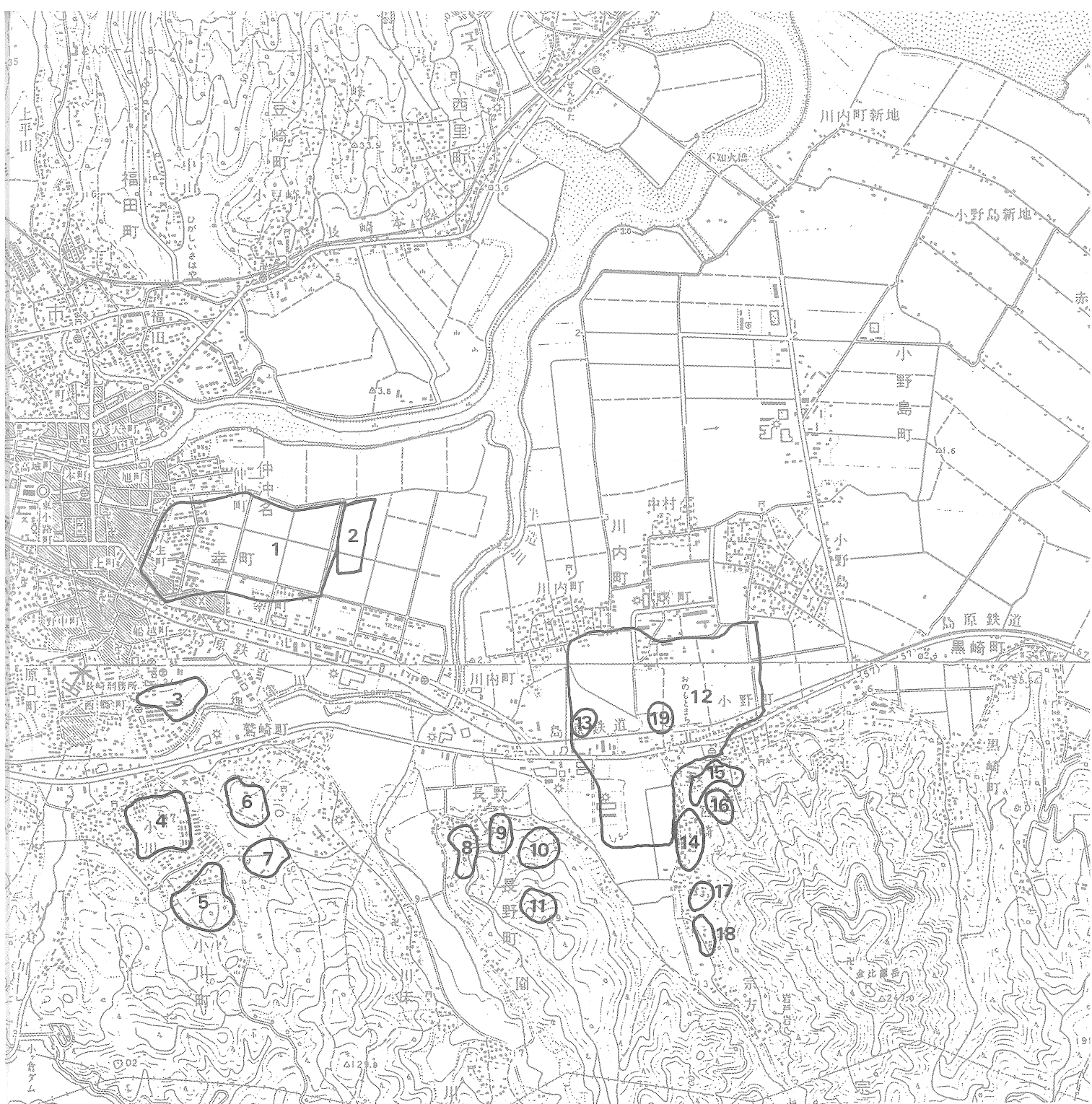
「小野古墳」諫早市教育委員会 1978。

「小野宗方遺跡」諫早市教育委員会 1994。

「小野曾屋遺跡」諫早市教育委員会 1995。



第1図 諫早市の位置



1. 田井原条里遺跡 (古代～中世)
2. 沖城跡 (中世～近世)
3. 諫早農高遺跡 (弥生)
4. 林ノ辻遺跡A地点 (弥生～中世)
5. 林ノ辻遺跡B地点 (弥生)
6. 十仙原遺跡 (弥生)
7. 源内谷遺跡 (弥生)
8. 崎田遺跡 (弥生)
9. 大久保遺跡 (縄文)
10. 水葉山遺跡 (縄文)
11. 長野城跡 (中世)
12. 小野条里遺跡 (弥生～中世)
13. 小野曾屋遺跡 (縄文～中世)
14. 小野宗方遺跡 (縄文～近世)
15. 宮崎館遺跡 (旧石器～中世)
16. 小野城跡 (中世～近世)
17. 水の手遺跡 (古墳)
18. 太郎丸遺跡 (弥生)
19. 小野扇町遺跡 (縄文～古代)

第2図 周辺遺跡分布図

(国土地理院発行 1/25,000 地形図「諫早」・「諫早南部」を使用)



第3図 調査地点周辺図 (1/5,000)

III. 調 査

III-1. 調査区の設定

今回の調査は水路部分に限られているので、調査区も工事用の区画を採用した。水路予定地には20m間隔で右図のような番号がついた基準杭が打たれており、それを調査区名とした。24区以北については省略している。

水路の設計幅は5mであるが、掘削の深さを考慮してトレンチの幅は3mを基本とした。南北方向については調査期間と予算の許す範囲で、長く取ることとした。

25区より北側については、遺構の存在が希薄と想定されたため重機による表土剥ぎを先行させたが、24区において杭頭が出土したため調査を実施した。

調査の重点は28区以南に置き、1987年に実施された調査^{*}において、T15から出土した杭列の方向が28区にかかるかも知れないことなども考慮した。

32区の南側には、土層確認のため小規模なトレンチをいれ、「32試」という調査区名を付けた。

*「宮崎館等範囲確認調査概報」一第2次一 1988

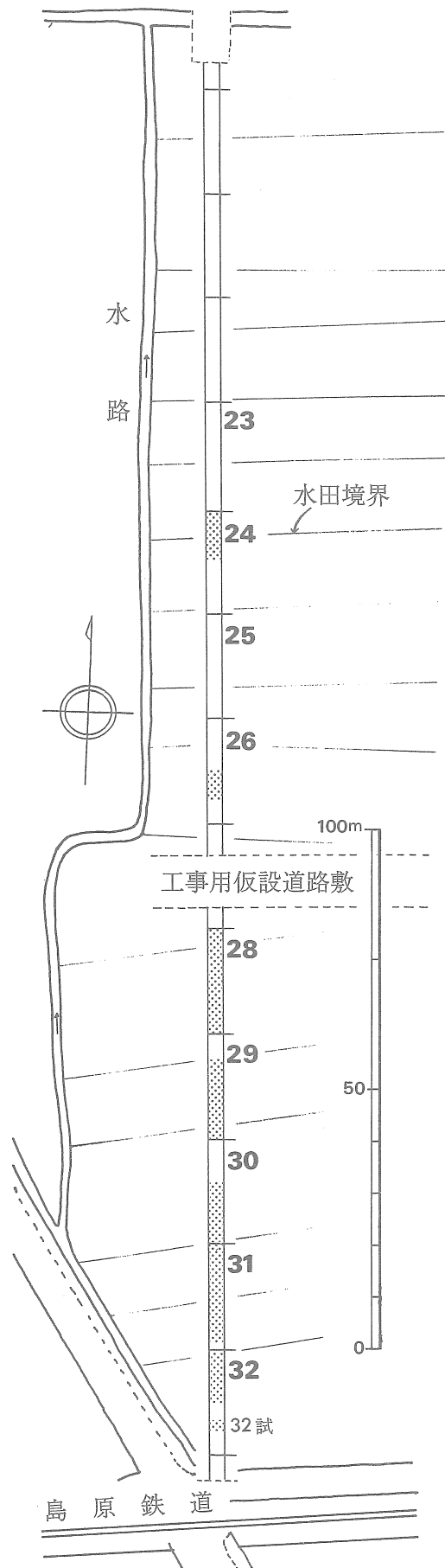
III-2. 土層について（第6図参照）

調査範囲はすべて、いわゆる「がた」と呼ばれる粘土（有明粘土）の堆積した地域であって、その基本層序は①耕作土（黒褐色）→②床土（灰色）→③灰茶色粘土層→④青灰色粘土層となっている。このうち床土は水田によっては形成されていない場合がある。

人間活動の痕跡が認められるのは灰茶色粘土層までであるが、杭の下端は青灰色粘土層に達していることがある。青灰色粘土層は低くなるほど青みを増す。24区における杭の取り上げ時には、標高1m以下に自然貝層や薄い砂層が認められた。

第6図〔土層図〕には26区から32区までの土層を掲載した。24区はすでに工事が開始されていたため、土層図を記録していない。

各調査区とも前述のように粘土層の堆積で構成されてい



第4図 水路工事の位置と調査区の設定
(網目は発掘部分)

るが、28区の分析サンプル採取地点付近の標高2 m付近には、木材（自然木）の堆積が多く見られた。また30区と31区の境界付近（縄文式土器出土地点）にも木材の堆積が見られた。29区南半においては標高2.7m付近に、偏平なレンズ状の木質（木材や木の葉が細かく砕けたもの）の堆積があり、沼地状の地形があったと推定される。従って付近の地形は、人間によって耕作地として利用される以前は、現状から受ける印象よりも複雑な様相を呈していたと考えるべきであろう。

III-3. 出土遺構

1) 24区出土の杭列（第5図・第7図）

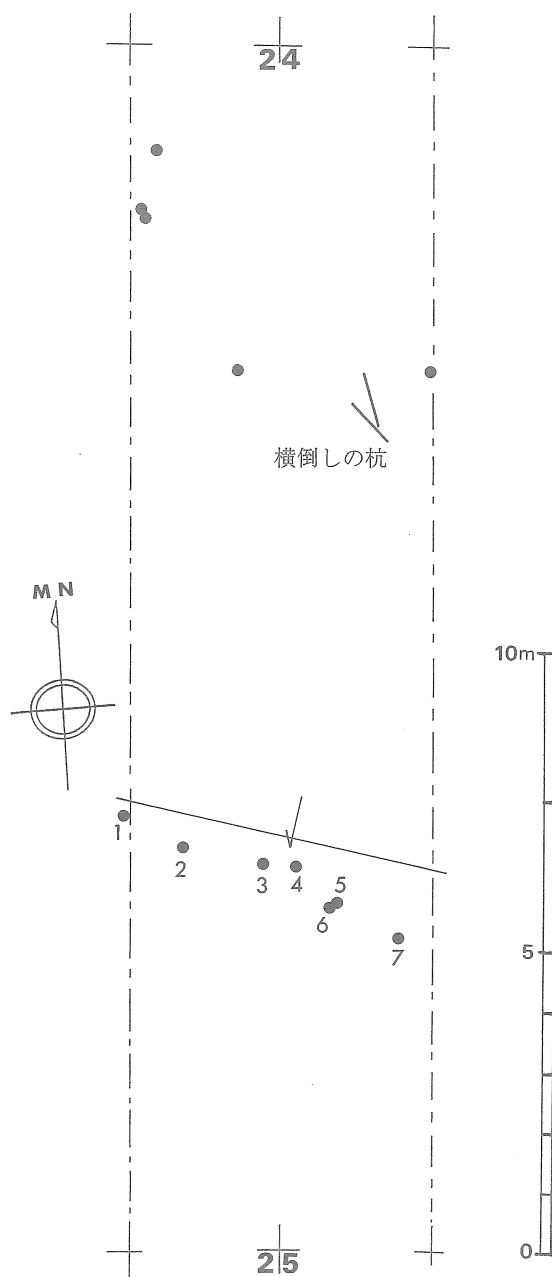
工事開始後、24区において杭頭らしきものが見えていたので、急きょ調査を実施した。24区の間地点よりやや南側に列を成した杭と、その北側10m付近に数本の杭が散在していた。

杭列は右図に示したように5 m幅のなかに7本の杭が打たれており、列の方向はきちんとはしていないが、おおむね磁北から約62°、真北からは67°傾いている。

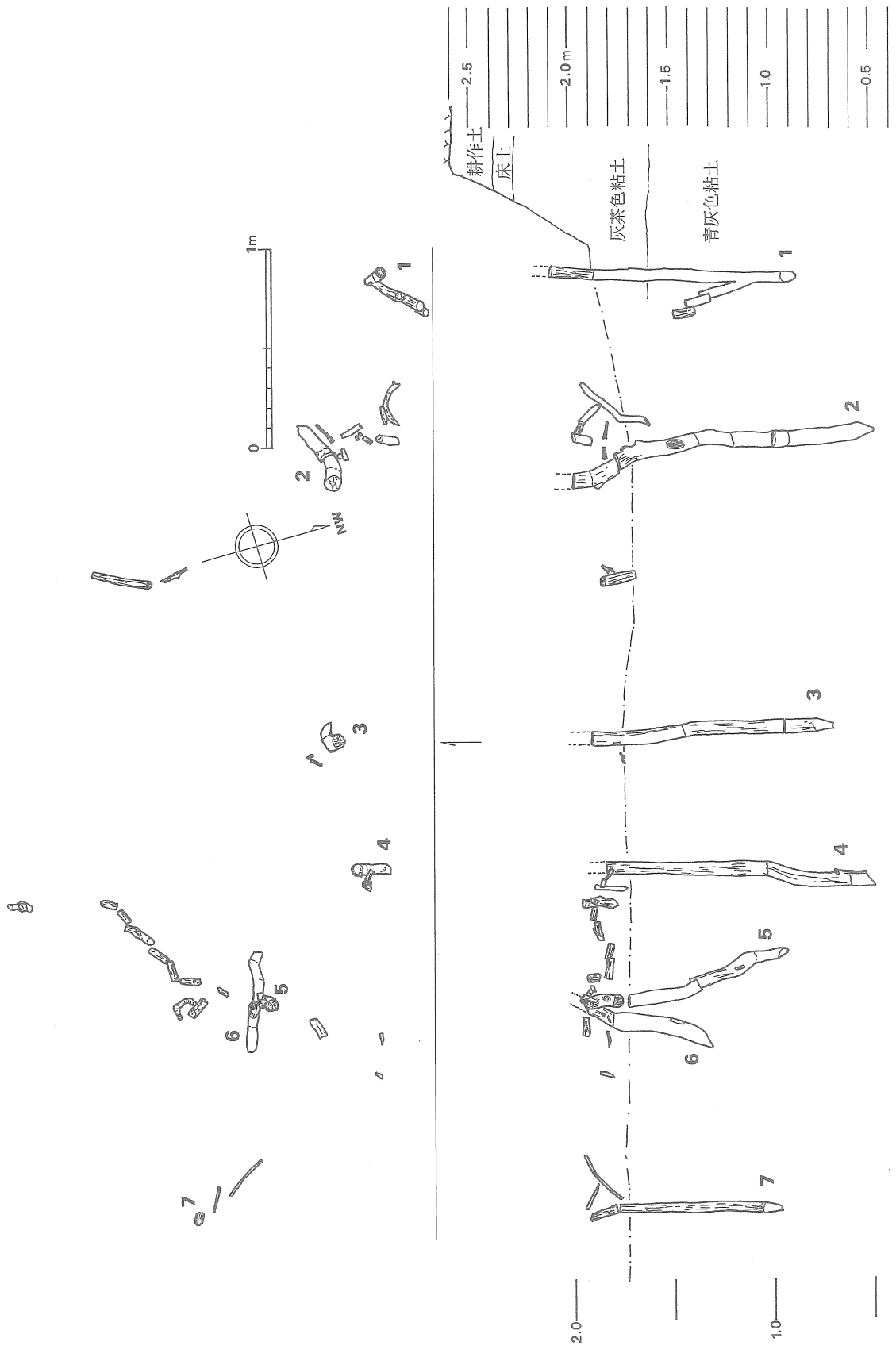
残っていた樹皮から判断すると、そのほとんどが桜材を用いたものと思われる。径8 cm程度の丸木の小枝を付け根で切り落として使用しているが、No.1の杭は枝を30cmほど残したまま使っている。先端を両面から切り落とした材と片面のみ切り落とした材が混在する。最長1.5m程度の残存状況であったが、重機によって頭部が削られており、出土時より20~30cm程長かったものと思われる。

腐食の程度はかなり進んでおり、埋まったままの状態ですでに横方向に割れていたものが多かった。共伴する遺物など年代を推定出来るような材料は無かった。

北側に散在する杭の材と腐食の程度は列状の杭と同様である。2本の杭が放置された状態で出土していることについては、後考を期したい。



第5図 24区杭出土位置図（1/125）

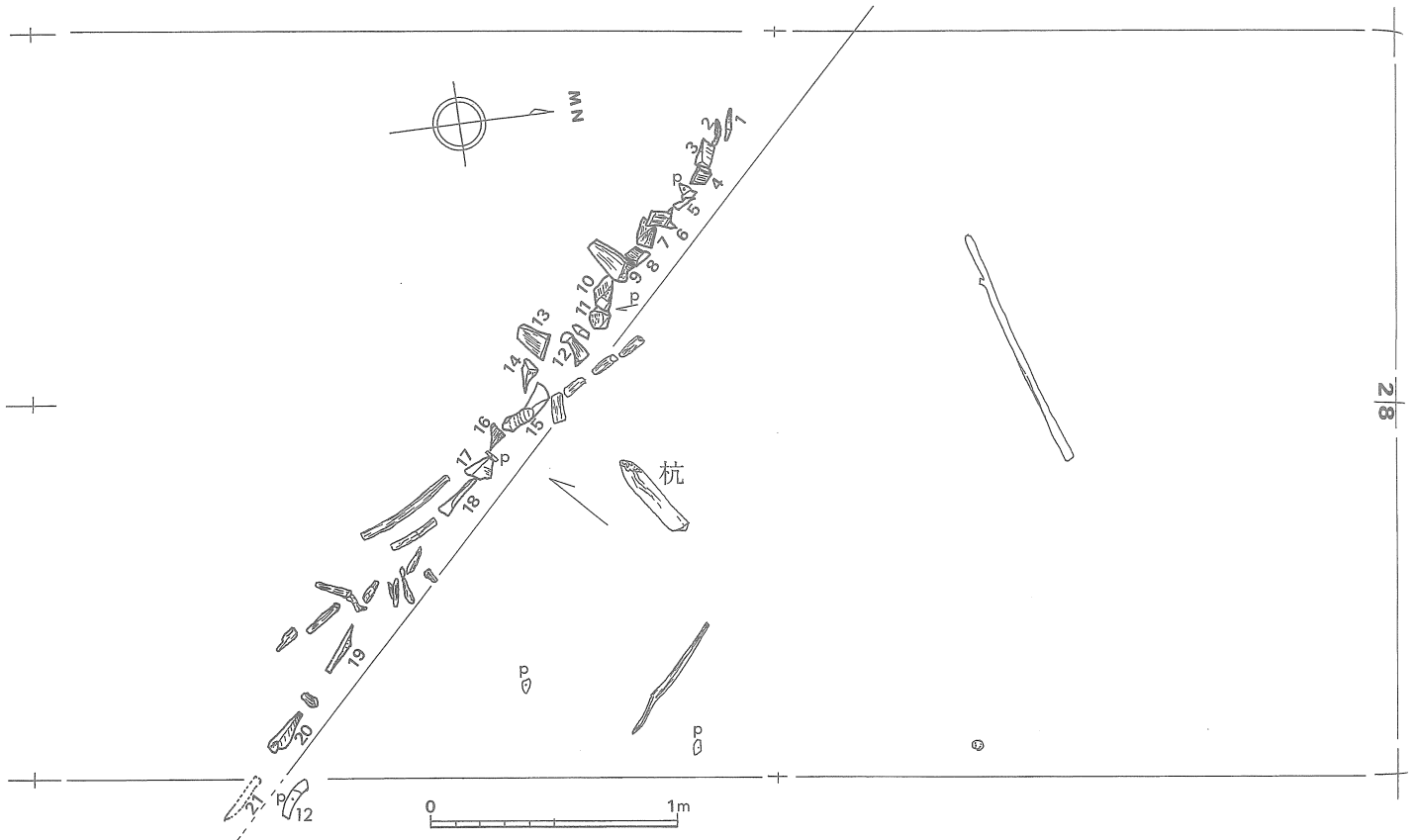


第7图 24区杭列 平面图·立面图 (1/30)

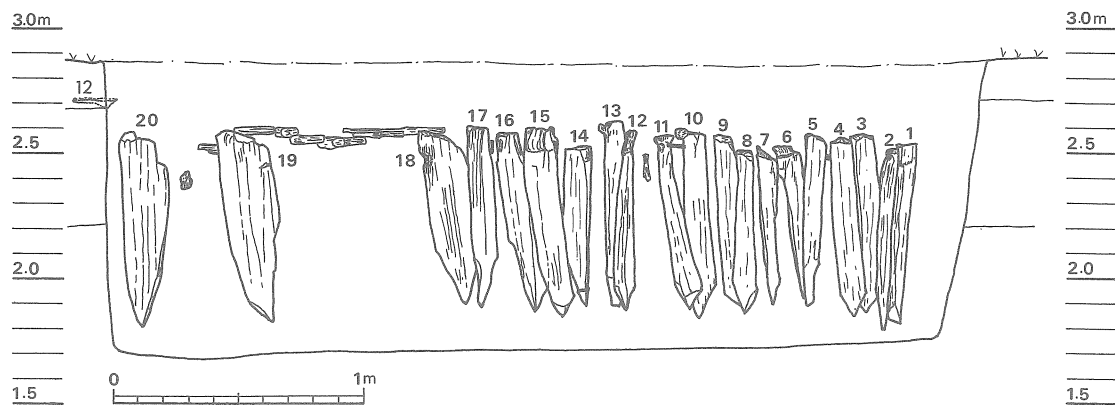
2) 28区出土の杭列 (第8図・第9図)

28区北端より約3m南に寄った地点で杭列が出土した。かつて1987年調査のT15において杭列が出土していたが、今回の調査に当たって、その杭列が部分的なものでなければ28区の北端付近に達するであろうと予想していた地点であった。

トレンチ幅3mの間に20本(記号BKR 1~20)がほぼ垂直に打ち込まれており、1~18までは相接して、18と19の間は50cmの間隔があげられている。なお最終的な杭取り上げ時、東壁内に20とほぼ同形の杭を発見したので、これをC¹⁴年代測定用資料として採取した。



第8図 28区杭列 平面図 (1/30)



第9図 28区杭列 立面図 (1/30)

杭頭部は標高2.6m付近、下端は1.8m付近にあってほぼ揃っている。杭頭部は圧縮されてひび割れた（ひからびた）ようになったものがある。

杭列には横方向に組み合わされた部材やしがらみ状の構造は全く認められなかった。幅3mの限られた範囲での計測であるが、杭列の方向は磁北から約52°西（真北からは57°）に傾いている。調査部分中央付近の北側に丸木の杭が打ち込まれていたが、杭列との関連について判断できなかった。

杭列の機能については検討中であり、中間報告的見解であるが、杭列南側の土層が安定しており、北側には杭より低い位置に木材の溜まりが見られることから、南側を耕作地とし、北側に水路を設けるための護岸施設として理解しておきたい。

調査時点での杭列の年代を推定する資料としては、杭列頭部にはさまっていた土器がある。第8図中に〔P〕を付けて位置を示している。いずれも甕の胴部と思われる小破片であるが、胎土・色調・焼成の程度などから弥生前期～中期の土器と判断される。これらの土器片は杭がほぼ頭部まで埋まった時点で、何らかの流水で運ばれてきて杭列に引っ掛かったものと思われる。さらに杭列の東壁際において、弥生中期の甕の口縁が出土している〔P12=実測図番号〕。この土器は杭列頭部より約10cm上にあり、弥生中期には杭列がほぼ埋没状態にあったことを想定させる。杭材の樹種の鑑定は行っていないが杉と思われる。丸木を板状ないし三角柱状に荒く縦割りにし、先端を加工している。加工面は滑らかで金属製の刃物を用いたように見える。先端が黒変したものがあり、表面を焼いた可能性がある。（P14 第12図参照）

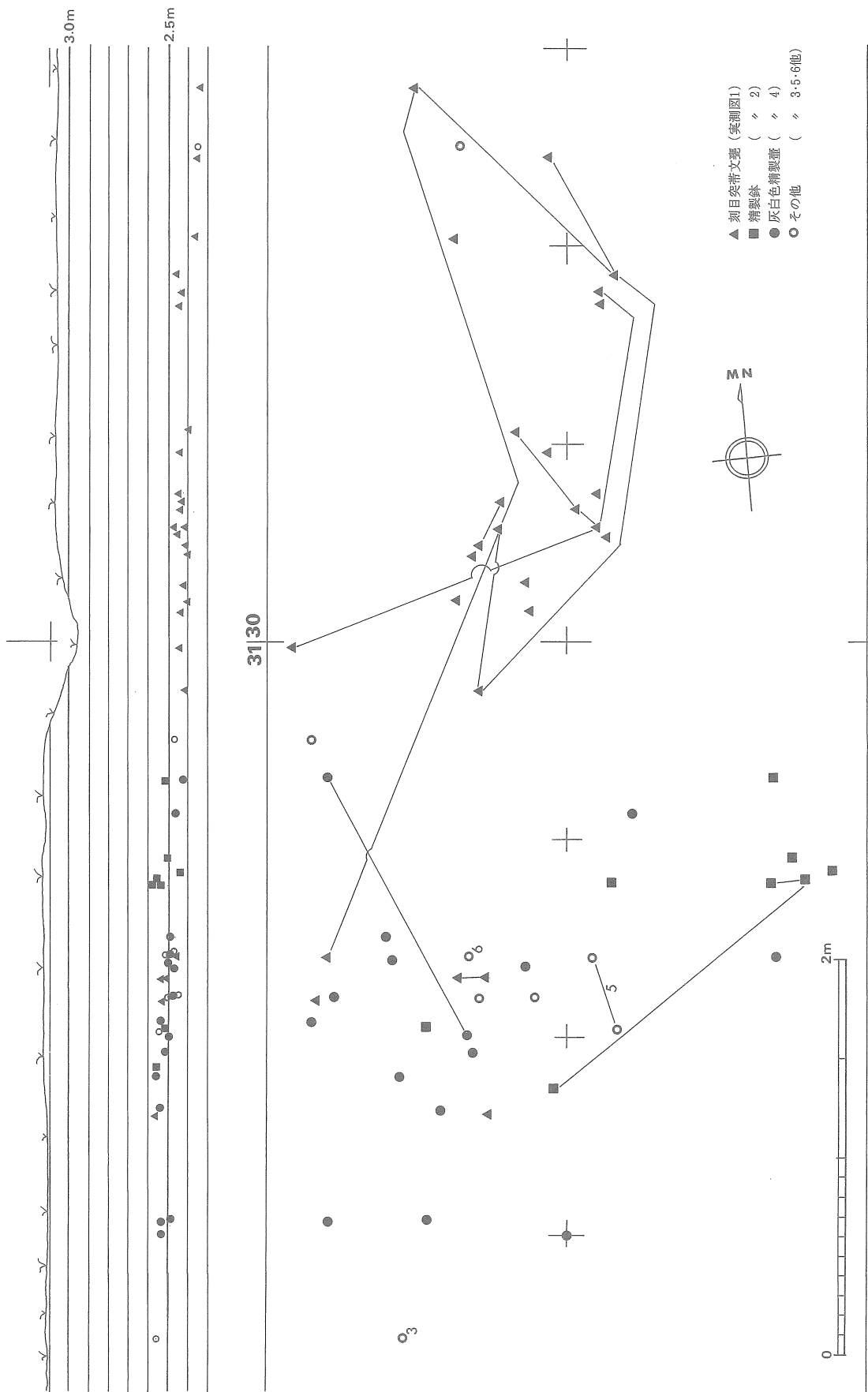
III-4. 出土遺物（第11図）・（P15 出土遺物レベル表）

今回出土した遺物（主として土器）の総数は、約100点である。その半数が30区南半から31区北半にかけて出土した縄文式土器（晩期）の破片である。さらに、そのほとんどは接合関係などから概ね3個体の土器が割れて散らばったものと判断される。この一連の縄文式土器破片は、標高2.34mから2.57mの範囲で北方向に緩やかに傾斜して出土した（第10図参照）。ただし、東西方向は幅3mに限定されているため、広がり状況は追求できていない。

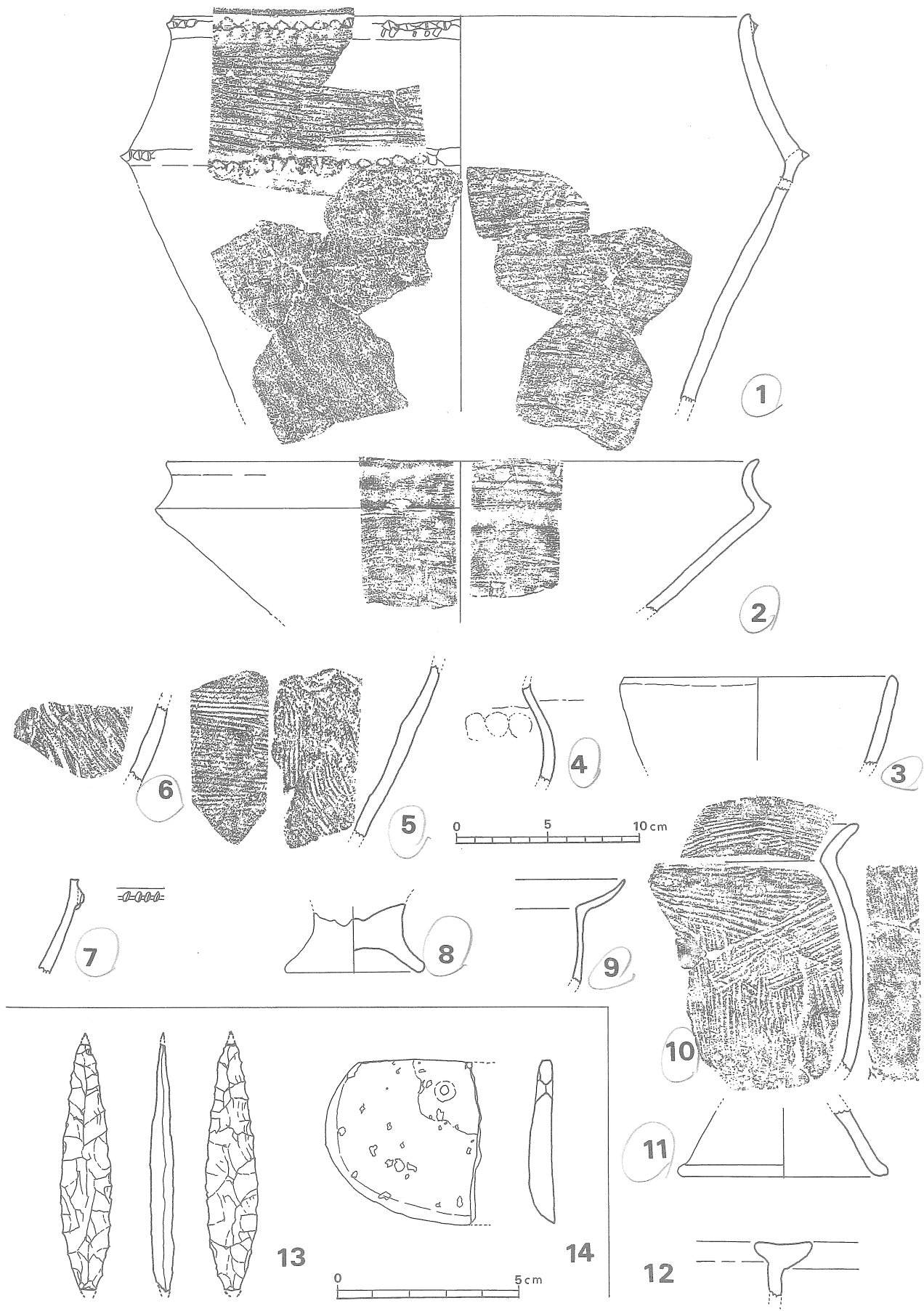
P15に今回の調査において出土位置を記録したすべての遺物のレベル表を掲載している。標高2.8mを越える遺物については、耕作土直下であるため後世の流入の可能性が高い。

1) 縄文式土器（第11図 1～6）

1は口縁端より2～3mm下と肩部に刻み目突帯を持つ甕形土器である。口縁部の突帯の下側には突き刺した穴状の痕跡がある。肩部の突帯はつぶれた部分が多い。胎土は荒く灰色を呈している。外面には煤が付いており黒く見える。肩より上は内外とも横方向のへらなで、肩より下は内外とも荒いへらなで状の調整である。復元口径約32cm。2は鉢形土器の上半の破片と思われる。内外面とも丁寧な横方向のへらミガキが施され、黒光りしている。断面は灰色を呈する。この破片の下部に相当する破片は全く見つからない。復元口径約32.5cm。3は碗形の土器と思われる。やや荒い作りで、芯まで黒色である。外面には炭化物がかなり付着している。復元口径約14.5cm。4は破片数は多いものの図化できる部分が少なかったが、小型の壺形土器



第10図 縄文式土器出土位置 (平面・立面図) (1/30)



第11图 出土遺物実測図 (1/3・2/3)

と思われる。灰白色の丁寧な作りで表面は滑らかである。以上の4点については、縄文晩期のいわゆる「夜臼式土器」に相当すると思われる。5は外面が褐色、内面は肌色を呈し、焼成が悪い。外面には畝状の、内面には横方向の櫛描き状の調整がある。胎土に石英粒を含んでいる。6は外面に荒い条痕を施し、外面は灰色、内面は黒色を呈する小破片である。

2) 弥生式土器 (第11図 7・12)

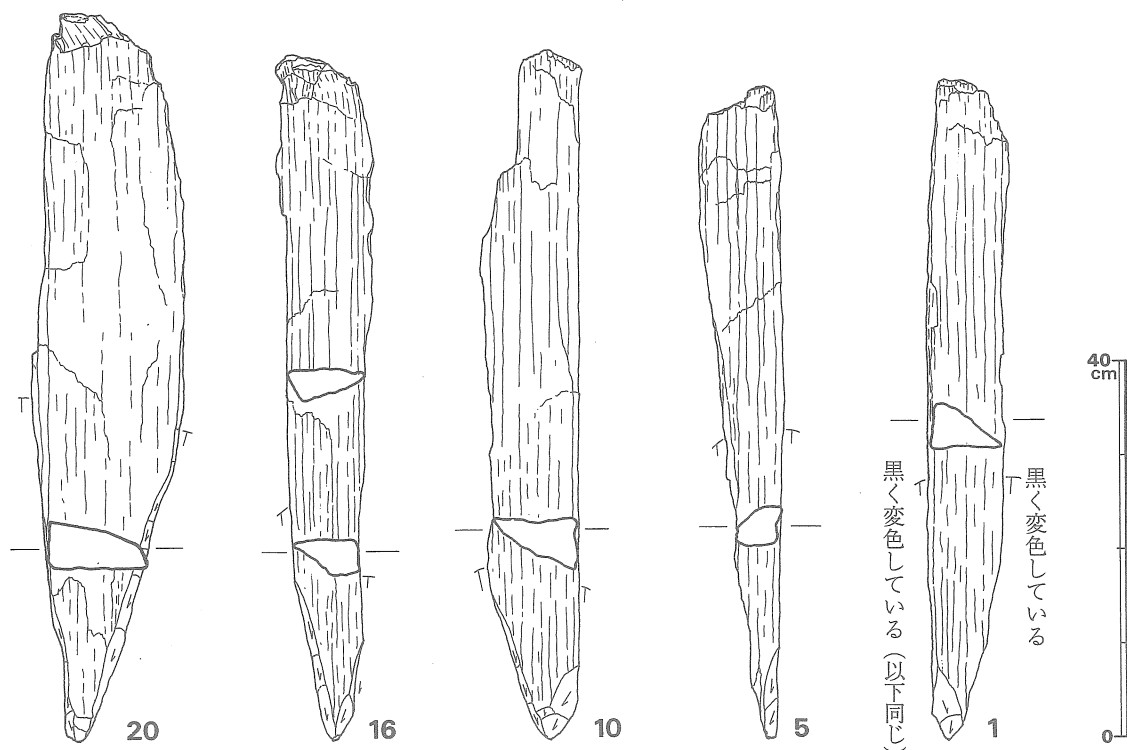
7は胴部の破片と思われるが刻み突帯がある。黒褐色を呈し、突帯付近には炭化物が付着している。12は28区の杭列の直上にあったもので、甕の口縁である。ややローリングを受けている。口縁から内面にかけては薄い肌色、外面は褐色である。

3) 土師器 (第11図 8~11)

8は赤橙色を呈する脚部だけの破片である。底径8cm程度であるが、ゆがみが強い。9は薄い作りの鉢形土器で内外とも表面の剝落が著しい。10は小型の甕の破片である。外面は縦方向の細かな刷毛目、口縁内面は横方向の刷毛目、内面は交差するような刷毛目で仕上げている。薄い茶色を呈し焼成は悪い。外面には煤の付着が認められる。11は高杯の脚部のような破片である。ローリングを受け表面が剝落している。肌色を呈する。底径約11.8cm。

4) 石器 (第11図13・14)

13は打製の尖頭器である。先端部と基部を僅かに欠き現存長6.6cm、重量4.8gを計る。サヌカイト質の安山岩を用いている。14は安山岩製の小型の石包丁である。片刃で穿孔が極めて小さいのが特徴である。このタイプは「小野曾屋遺跡」でも出土しているが、安山岩の質は14のほうが荒い。



第12図 28区出土杭実測図 (杭の番号は第8・9図と共通)

出土遺物レベル表

※1		※2		※3		※4														
No.	標高	区	距離	分類	摘要	実測図No.	No.	標高	区	距離	分類	摘要	実測図No.	No.	標高	区	距離	分類	摘要	実測図No.
1	202	2.385	28	283	弥生?	前期~中期	実測図12	58	11	2.568	31	120	縄文	鉢	実測図2					
2	205	2.484		284	弥生			2												
3	201	2.541		320	弥生?			実測図2												
4	203	2.616		352	弥生			4												
5	206	2.544		365	弥生			実測図1												
6	207	2.724		445	弥生			4												
7	208	2.672		854	弥生			4												
8	204	2.561		1707	弥生?			4												
9	72	2.750	30	800	弥生	脚	実測図7	59	36	2.469	32	123	縄文	鉢	実測図2					
10	70	2.454		805	縄文			2'												
11	306	2.694		810	自然遺物 軽石			実測図2												
12	73	2.720		898	弥生			4'												
13	74	2.738		927	土師?			実測図1												
14	77	2.720		934	土師?			4'												
15	75	2.713		937	弥生			1'												
16	76	2.705		938	弥生?			2'												
17	78	2.729		938	弥生			5'												
18	303	2.722		989	自然遺物 軽石			4'												
19	79	2.682		1004	弥生?			4'												
20	80	2.677		1025	土師			実測図10												
21	81	2.684		1075	土師			81と接合												
22	82	2.672		1095	土師?			実測図1												
23	83	2.861		1302	弥生?			4'												
24	84	2.841		1454	弥生			脚部												
25	85	2.772		1474	弥生			脚部												
26	86	2.802		1550	弥生?			底部												
27	60	2.344		1729	縄文			甕	実測図1											
28	61	2.356	1755	縄文	甕	4'														
29	62	2.364	1757	縄文	甕	実測図1														
30	59	2.901	1770	弥生?	1'															
31	58	2.876	1788	弥生?	1'															
32	63	2.372	1794	縄文	甕	実測図1														
33	57	2.461	1815	縄文	甕	実測図1														
34	55	2.420	1823	縄文	甕	実測図1														
35	56	2.449	1829	縄文	細片	1'														
36	302	2.969	1830	不明	砂岩製砥石	実測図1														
37	64	2.403	1894	縄文	甕	1'														
38	53	2.439	1904	縄文	甕	1'														
39	66	2.451	1926	縄文	甕	1'														
40	52	2.423	1930	縄文	68と接合	1'														
41	65	2.440	1934	縄文	甕	実測図1														
42	51	2.420	1943	縄文	甕	実測図1														
43	54	2.471	1944	縄文	甕	実測図1														
44	67	2.449	1947	縄文	甕	1'														
45	68	2.407	1953	縄文	甕	1'														
46	50	2.404	1958	縄文	甕	1'														
47	49	2.425	1976	縄文	甕	1'														
48	48	2.403	1980	縄文	甕	1'														
49	69	2.442	1986	縄文	甕	1'														
50	45	2.452	31	5	縄文	39と接合	実測図1	102	304	2.856	32	1550	安山岩	ポイント	実測図13					
51	46	2.424		25	縄文			実測図1												
52	24	2.470		50	縄文			4'												
53	25	2.431		70	縄文			4'												
54	10	2.518		70	縄文			2'												
55	47	2.463		77	縄文			4'												
56	37	2.501		110	縄文			2'												
57	38	2.445		117	縄文			2'												

※1 取上げNoである。
 ※2 単位m
 ※3 各区北端からの距離。単位cm。東西の距離は割愛した。
 ※4 本文掲載の実測図中のNo.である。(')をつけたものはそのNo.の個体と同一と判断したもの。

IV. 28区出土杭の年代測定結果

諫早市埋蔵文化財調査協議会

小野扇町遺跡 自然科学分析報告
(¹⁴C年代測定)

貴，諫早市埋蔵文化財調査協議会殿より御依頼のありました「小野扇町遺跡 自然科学分析(¹⁴C年代測定)」が終了致しましたので，その結果を御報告申し上げます。

小野扇町遺跡 ¹⁴C年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 目 的

諫早市宗方町に位置する小野扇町遺跡から弥生時代前期と中期の遺物包含層の間に頭部を持つ杭列が検出され，杭列の所属時期が問題となっている。今回，この杭の一本（試料番号：BK R21）を試料として杭列の年代観を確認するため，¹⁴C年代測定を実施した。

2. 方 法

測定は学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。なお，半減期は LIBBY の半減期5570年を使用する。

3. 結 果

結果は表1に示す。弥生時代前期に相当する年代値と言える。

表1 ¹⁴C年代測定結果

遺 跡 名	試料名	質	測 定 結 果	Code.No.
小野扇町遺跡	BK R : 21	材	2210±80y.B.P. (260 B.C.)	Gak-19240

V. ま と め

1) 縄文晩期土器について

30区と31区の境界をはさんで縄文晩期の土器が出土した。他の時期の土器は含まれず、攪乱も受けていないと思われる。出土した標高は2.5m内外であり、北に向かって緩やかに低くなっている。その傾斜は1.5~2°であって、土器が堆積した時期の土地の傾斜を示すと考えられる。土器の表面の保存状態はかなり良好であり、破断面の痛みも少ない。従ってこれらの土器は出土地点か、出土地点に極めて近い地点で廃棄されたと判断される。これらの土器群は現在の地表から約50cm下の粘土層の中にあるが、縄文晩期の時期には標高2.5m付近の干潟の上に人間の活動が進出していたと考えられる。その後、海面の上昇によるものか、干拓に因るものかは判らないが、土器群は粘土の中に埋まって行ったと思われる。

今回の調査においては、土器以外の人間の活動を示す遺物や遺構は見つかっていない。今後この付近の調査が行われるときには、これらの土器群を使用した集団の拠点や、干潟の上に進出した目的を示す遺構等の発見が課題となるであろう。

2) 28区出土杭列の年代について (P16参照)

今回28区出土の杭1本のC¹⁴による年代測定を実施した。その結果は「2210±80y.B.P.(260 B.C.)」であった。これは弥生前期に相当する年代であるが、杭列の頭部に弥生前期~中期と思われる土器片が掛かっていること及び、頭部より上位から中期の土器が発見されたことなどの調査の所見と一致する。従ってこの杭列が弥生前期のものである可能性は極めて高い。

杭の年代についての関連資料としては、1988年調査のT15出土の杭があり、年代測定が2点実施されている。報告書^{*}によれば「2190±85y.B.P.」と「2280±80y.B.P.」というデータが出されており、今回の年代と一致している。

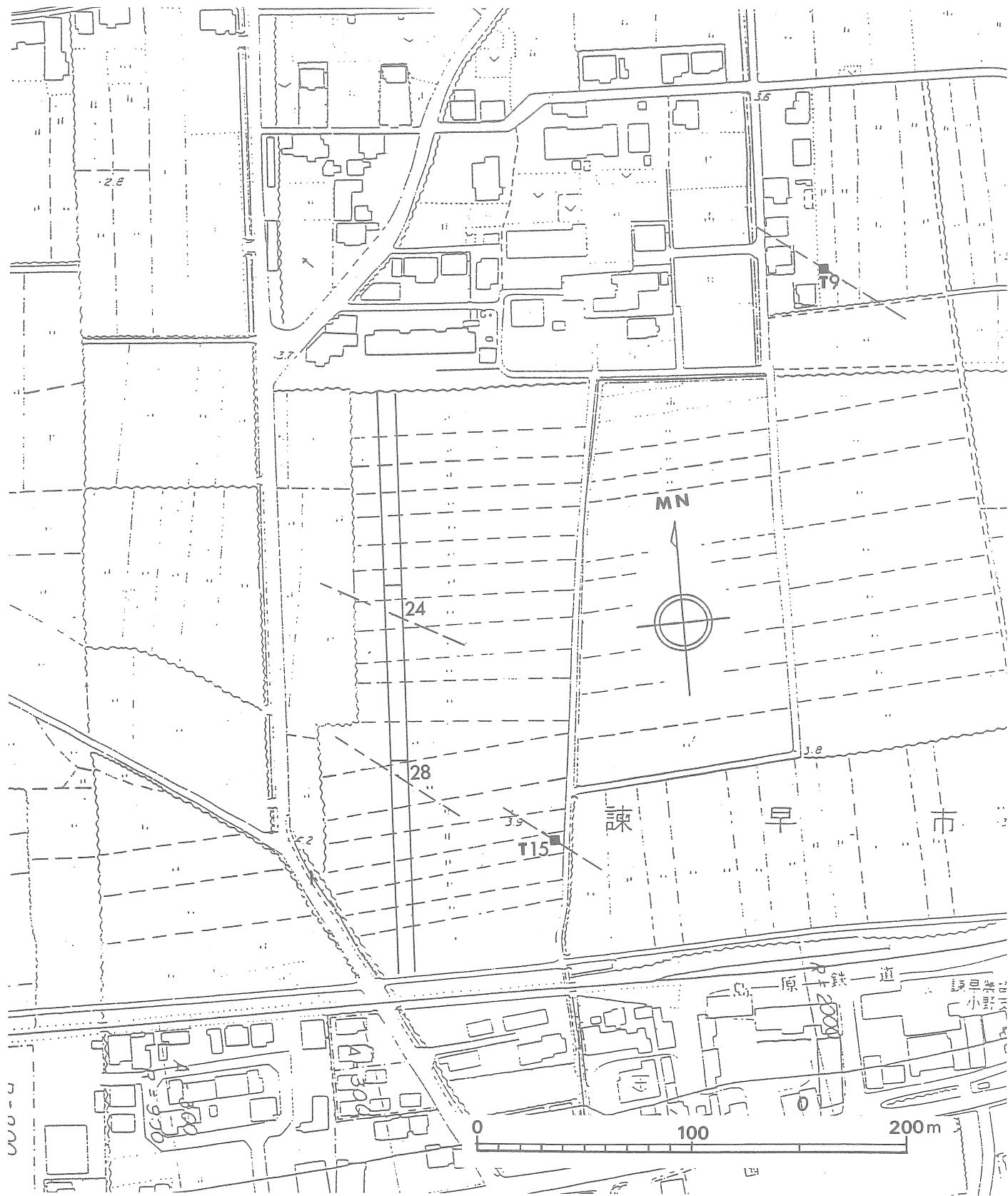
* 「宮崎館遺跡等範囲確認調査報告書」1989.

3) 杭列の方向について (第13図)

今回の調査において出土した28区の杭列は真北から約57°西に傾いて埋設されている。このラインを東南の方角へ延長すると前出T15付近を通る。T15の杭列は報告書^{*}によると「N-48.5°-W」とあるが、本書第13図には筆者の見解で真北から約57°西に傾いたラインを表示した。いずれにしても、年代測定の結果が一致すること、使用した材や加工が一致するものがあることなど、両地点の杭列が同時期に同じ計画のもとに施工された可能性が高いと判断する。従って、これらの杭列は弥生前期において、少なくとも80m以上にわたって設置されたと考えられる。以上の2例のほか、今回の調査における24区の杭列、1986年にT9^{**}において出土した「しがらみ様遺構」を含めた4例の角度は真北から約50~60°の間にある。この傾きについては私見であるが「この付近における干潟の成長(陸化)は現状の地形からうける印象とは異なり、北東の方角へ進んでいったと考えられる。つまり現在までに出土した杭列等は地形の傾斜に対して平行に設置されたのが自然ではないかと考えるからである。」と述べておきたい。

* 「宮崎館遺跡等範囲確認調査概報」一第2次一 1988.

** 「宮崎館遺跡等範囲確認調査概報」1987.



第13図 杭列方向図 (1/2,500)

4) 条里制施行の方向について (第14図・15図)

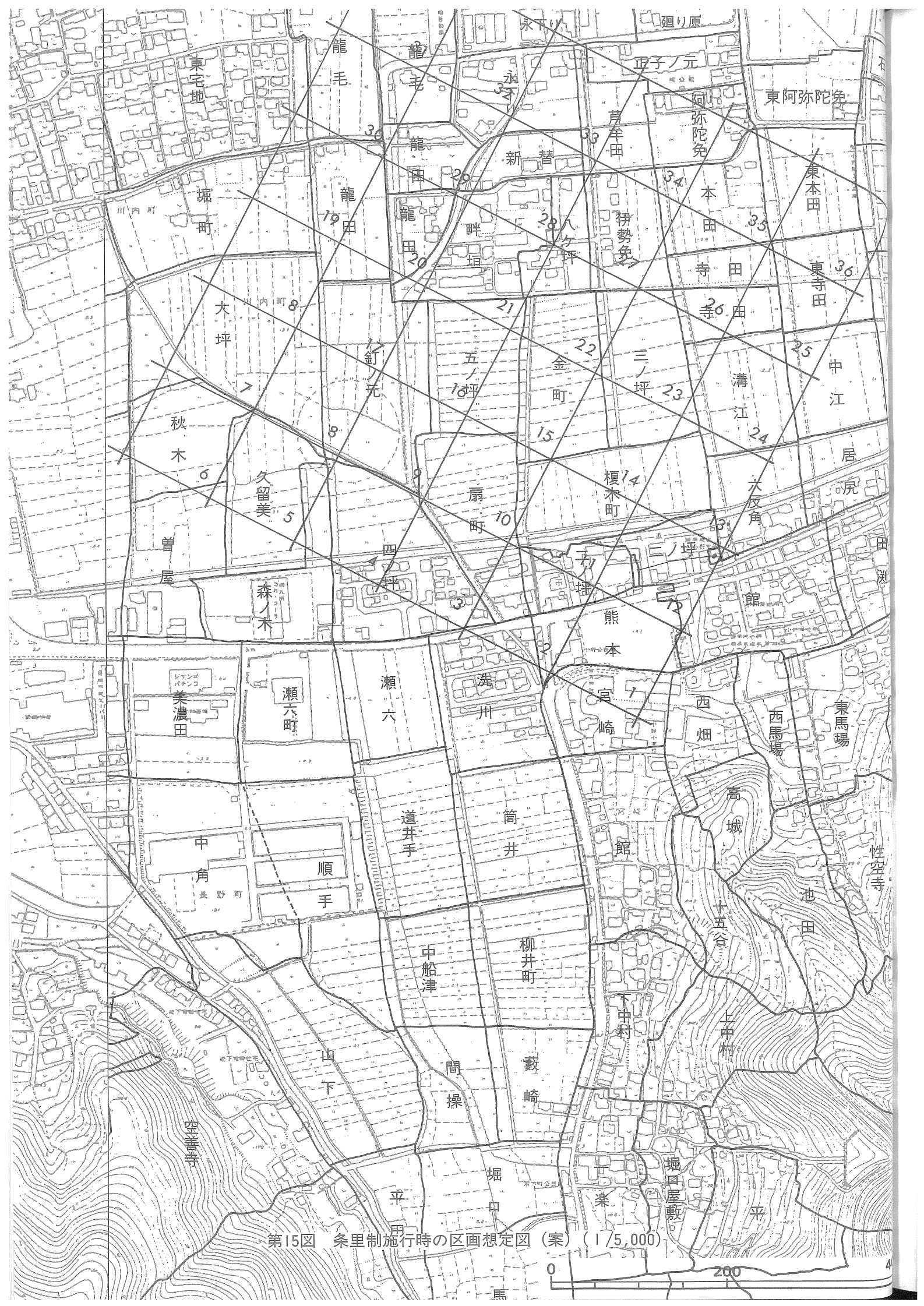
今回の調査範囲は総て「小野条里遺跡」に含まれる (第2図参照)。従って、調査結果から条里制について考えられることを述べておきたい。28区出土の杭列は前述のように条里との関連性は無い。24区出土の杭列については現段階では年代が想定できない。その他水田に伴う畦・溝

等も確認できなかった。何故条里制施行に伴うと思われる遺構を検出し得なかったかについては、後考を待ちたい。前項で述べた陸化の方向との関連では、従来から想定されてきた南北を基準とした条里の区画（第14図）とは違う条里の方向を想定しても良いのではないだろうかと考え、第15図にその案を示してみた。この案の根拠としては陸化の方向のほかに、字名「大坪」・「釘ノ元」とその南側の字名との境界に旧地形の痕跡があるのでは、と判断したことによる。また近世以降の干拓の方向（第2図の北東に見える）も参考とした。

（参考文献）「宮崎館遺跡等範囲確認調査概報」1987、1988。「宮崎館遺跡等範囲確認調査報告書」1989。
「多良山麓研究」土肥利男 1965。



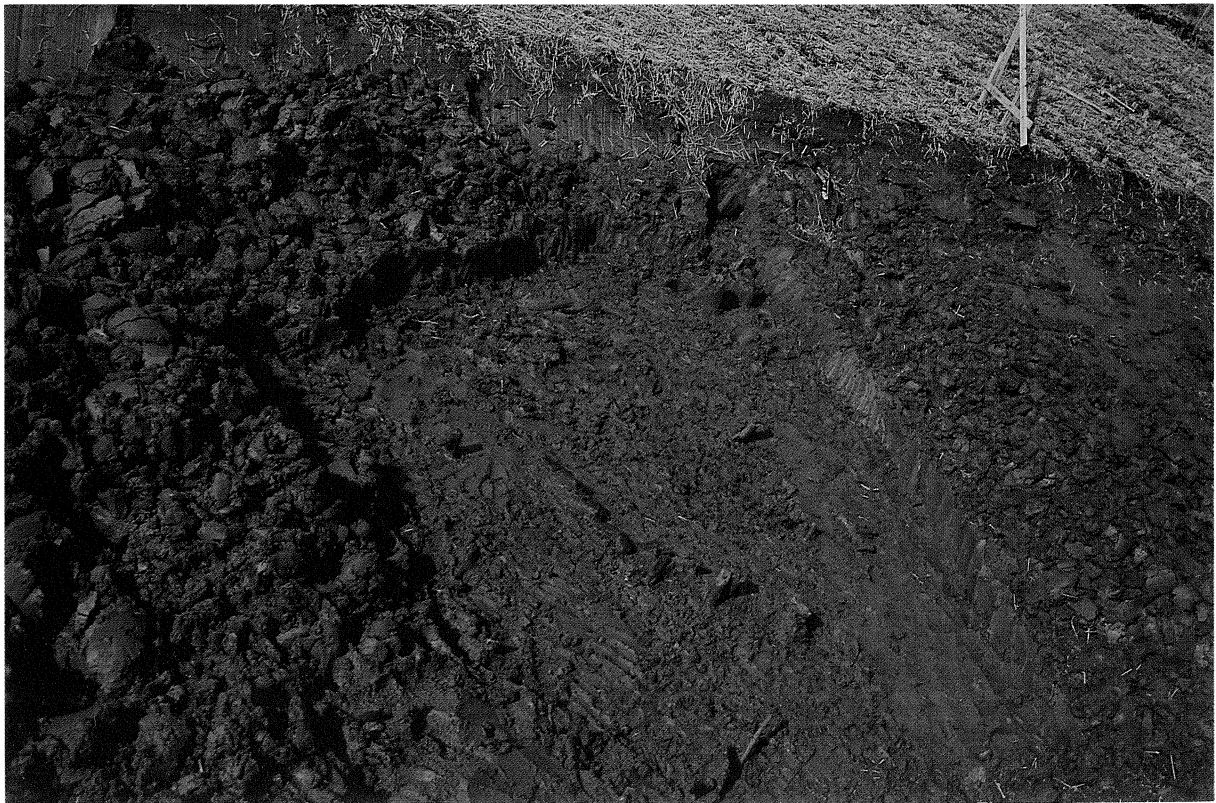
二第14図 従来の条里区画想定図 (1/5,000)
二（「宮崎館遺跡等範囲確認調査報告書」1989による）



第15図 条里制施行時の区画想定図 (案) (1/5,000)



① 遺跡付近の景観（南から）遠景は多良連山



② 24区杭列出土状況

性
空
寺



③ 28区杭列出土状況（北から）



④ 30～31区縄文式土器出土状況



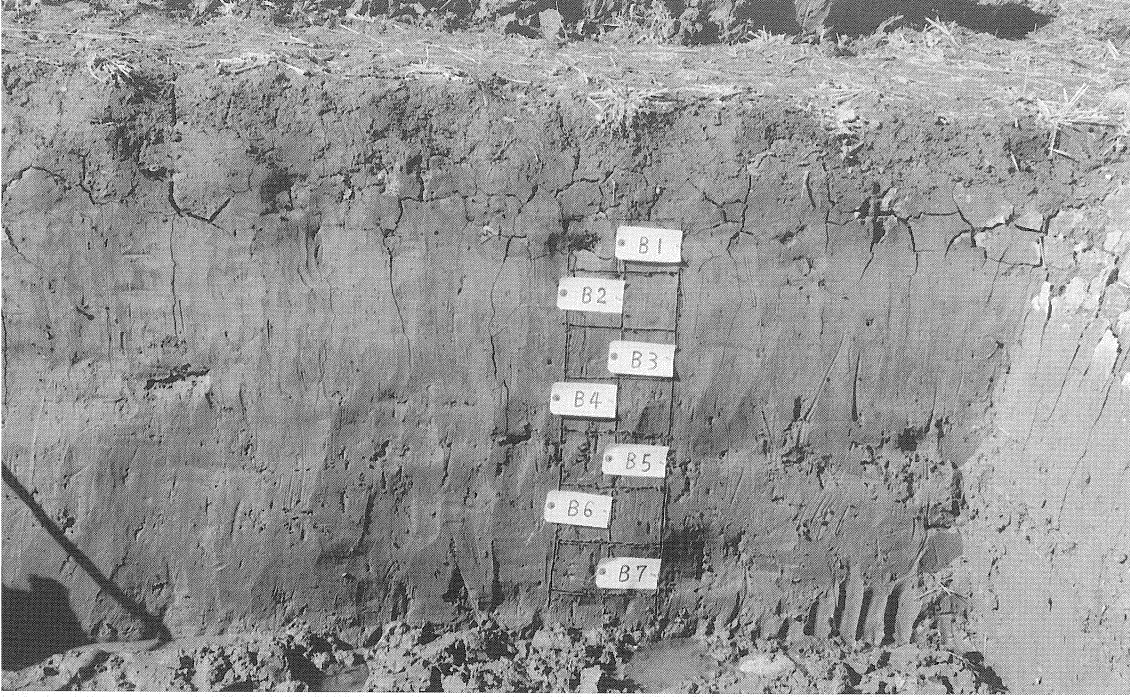
24区杭列（頭）出土状況

24
区
杭
埋
設
状
況

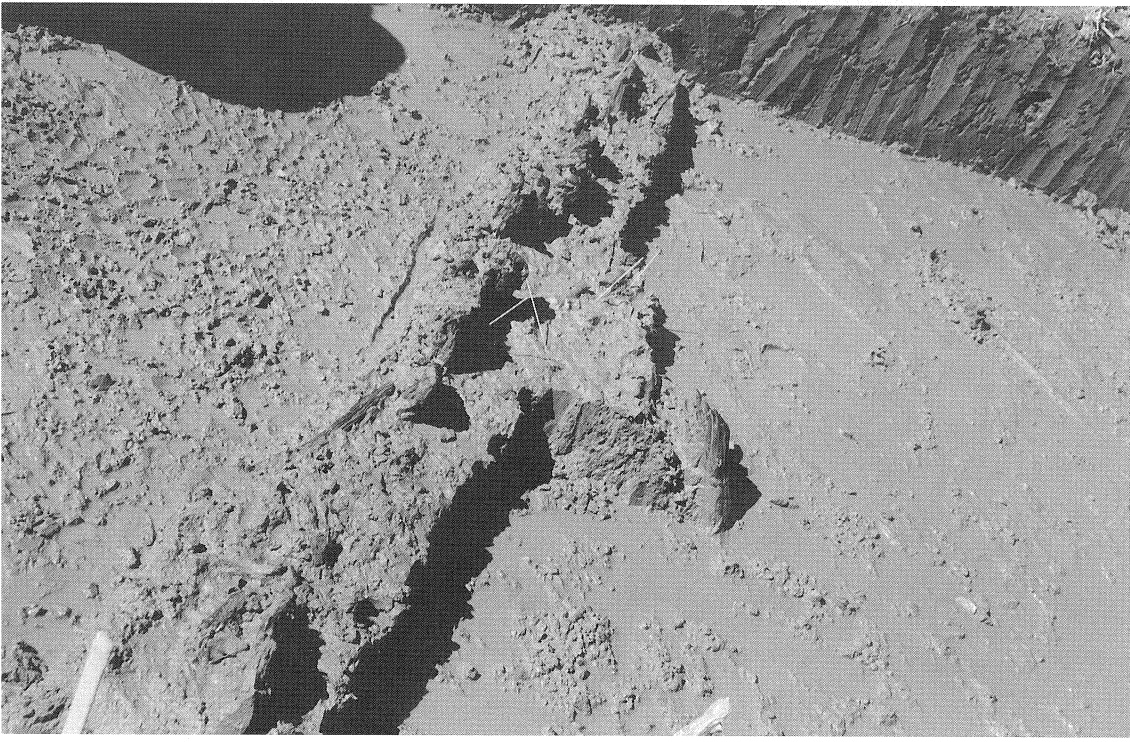
26区南壁の土層



28区北端西壁



28区杭列頭部出土状況



28区杭列頭部(南から)



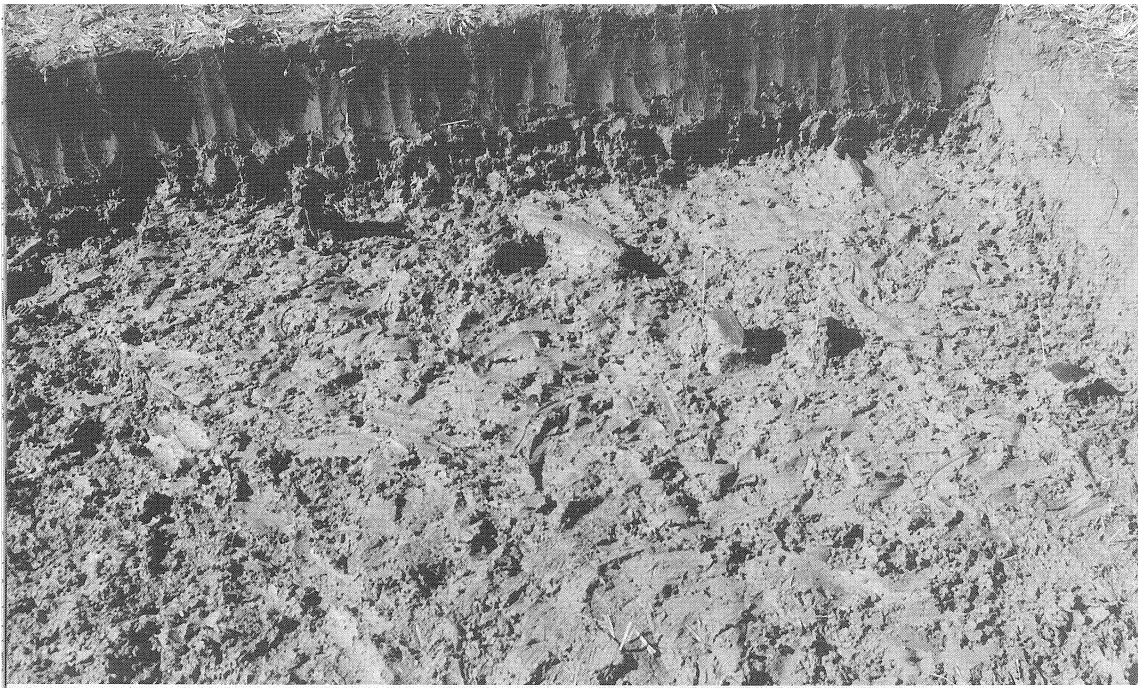


28区杭列出土状況（北から）

28区杭先端部の様子



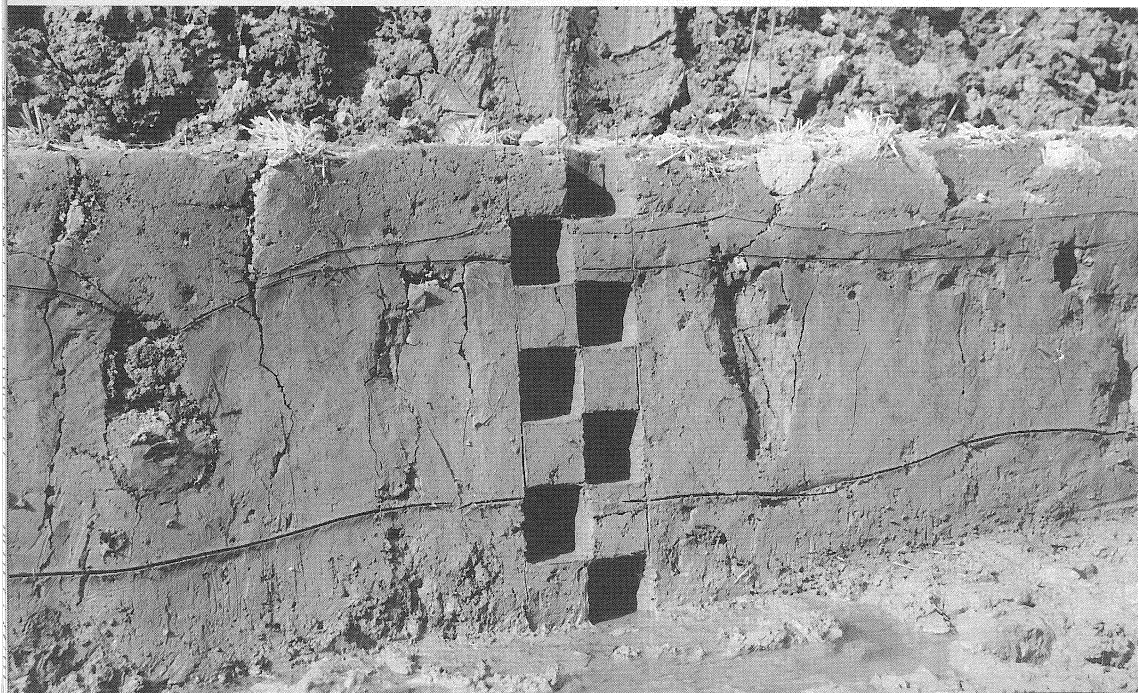
30区遺物出土状況(10) 他



30区遺物出土状況(8) 他



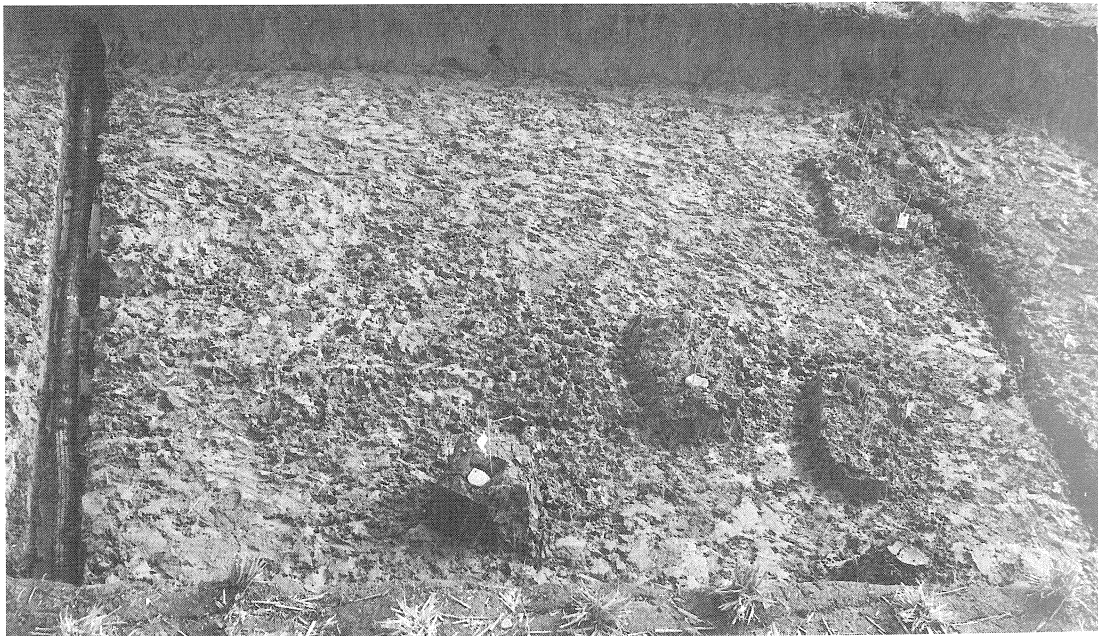
31区西壁分析サンプル採取状況



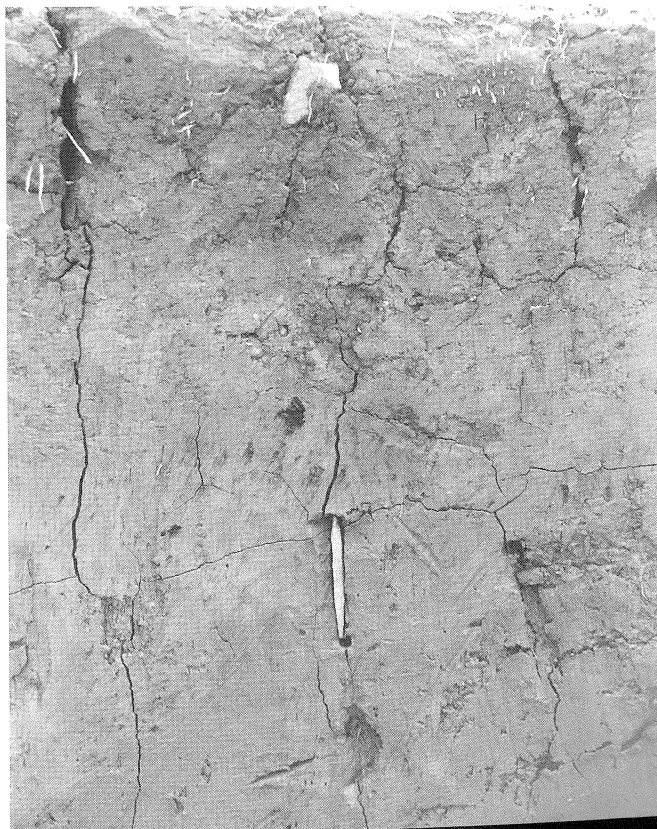
31区縄文式土器出土状況

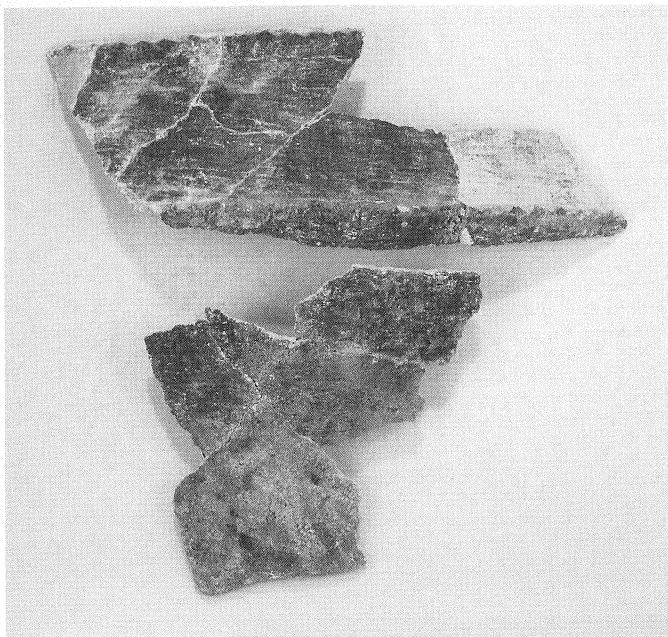


31区石包丁他出土状況

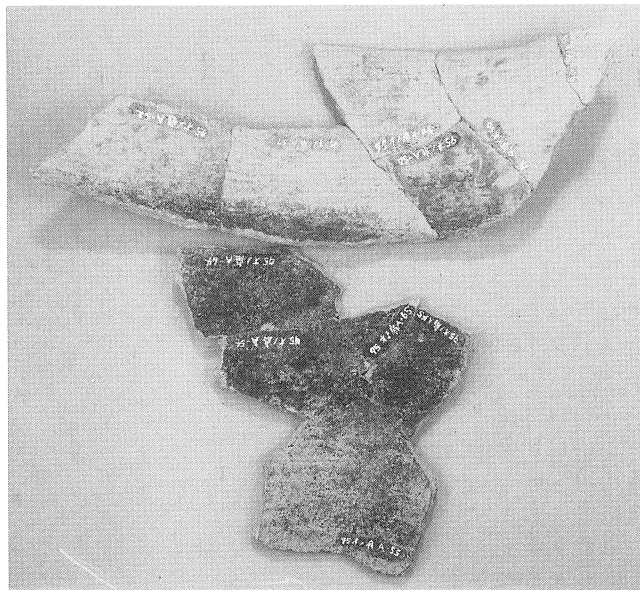


31区(試) 南壁ポイント出土状況

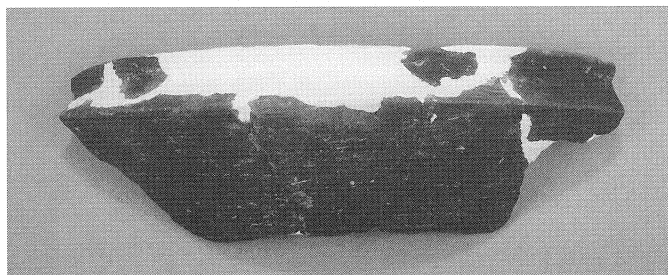




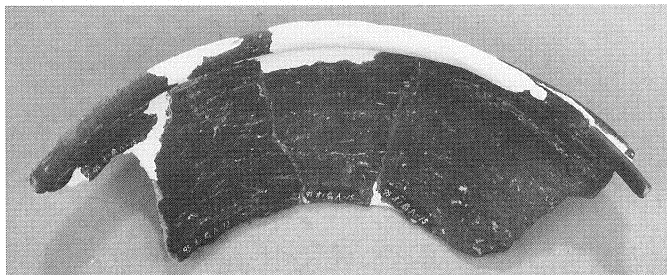
①



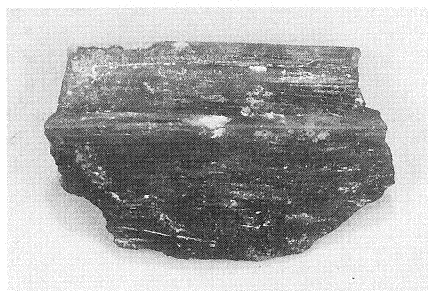
①の内面



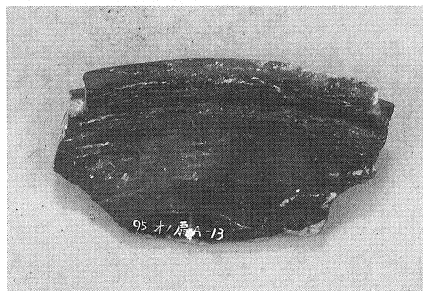
②



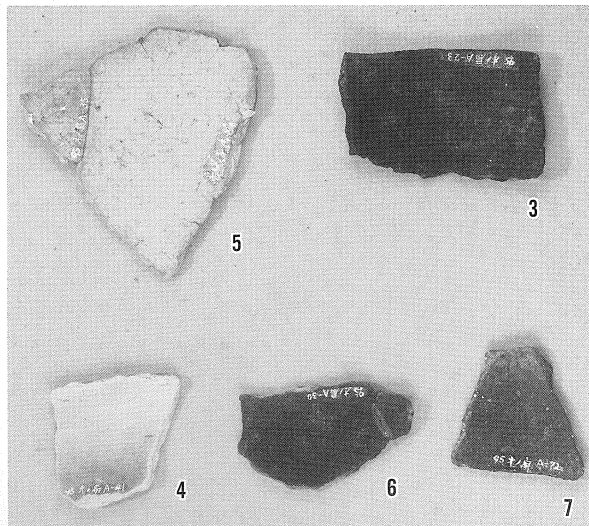
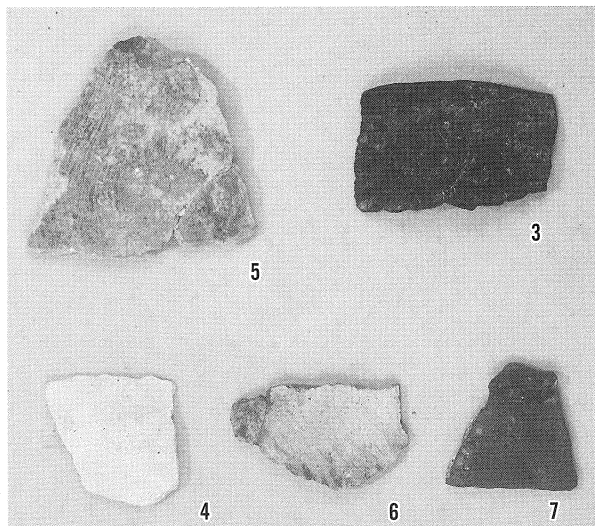
②の内面



②の別破片

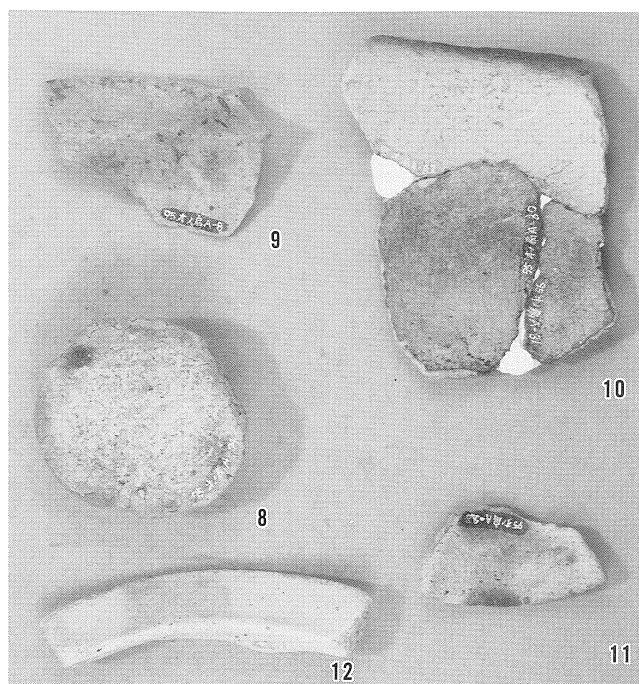
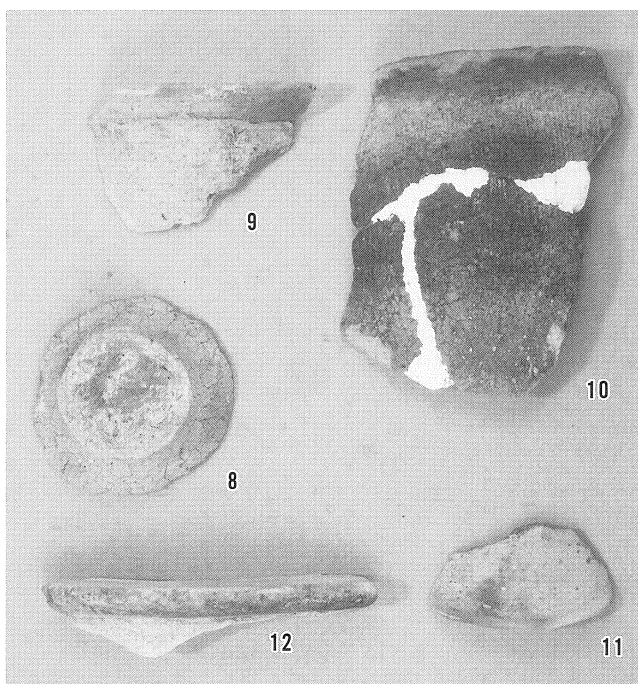


内面

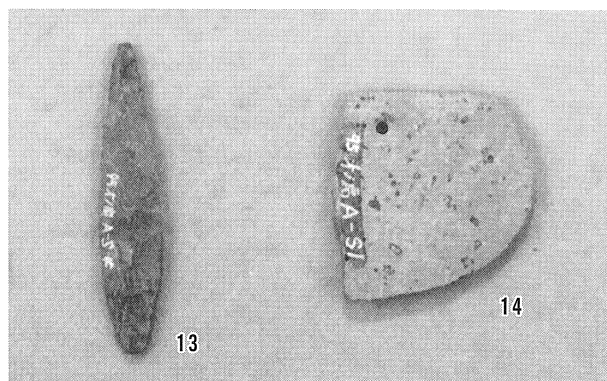
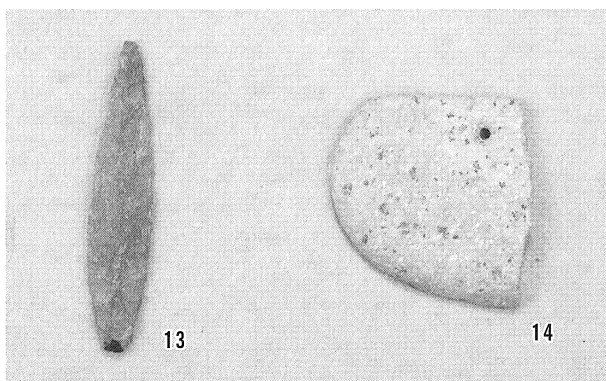


内面

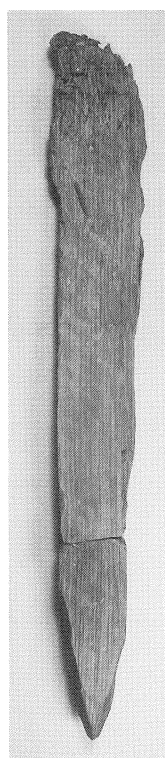
内面



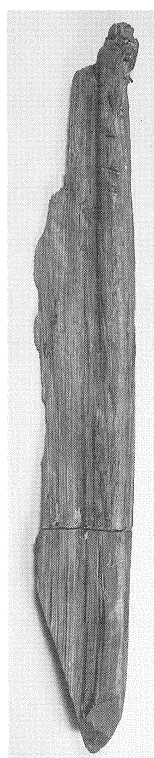
内面



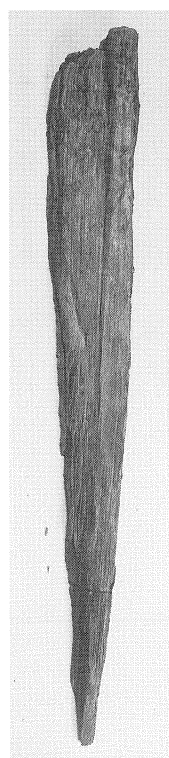
②⑩



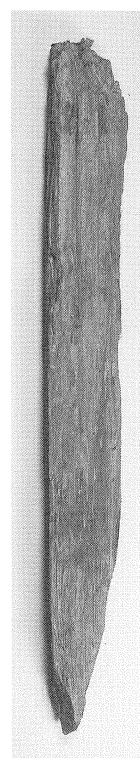
①⑥



①⑩



⑤



①

28区出土の杭、番号は出土状況図に一致する。

報告書抄録

ふりがな	おのおうぎまちいせき							
書名	小野扇町遺跡							
副書名	県営水田営農活性化排水対策特別事業（松崎東地区）に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	橋本幸男							
編集機関	諫早市埋蔵文化財調査協議会							
所在地	〒854 長崎県諫早市東小路町7番1号 TEL 0957-22-1500							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おのおうぎまち 小野扇町 いせき 遺跡	長崎県諫早市 宗方町字扇町	42204		32° 49′ 20″	130° 5′ 10″	1995.11.1) 1995.12.10	273m ²	圃場整備に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小野扇町遺跡	水田関連遺構	縄文晩期) 弥生前期	杭列2カ所	縄文土器, 弥生土器 土師器, 石器		C ¹⁴ 年代測定の結果によれば, 杭列は弥生前期のものと思われる。		

小野扇町遺跡

平成8年3月31日

文化振興課

発行所 諫早市埋蔵文化財調査協議会
諫早市東小路町7番1号

印刷所 (株) 昭和堂印刷
諫早市長野町1007

